

新しい芸術（仮）

アヴァンギャルドの展開とダダの起源

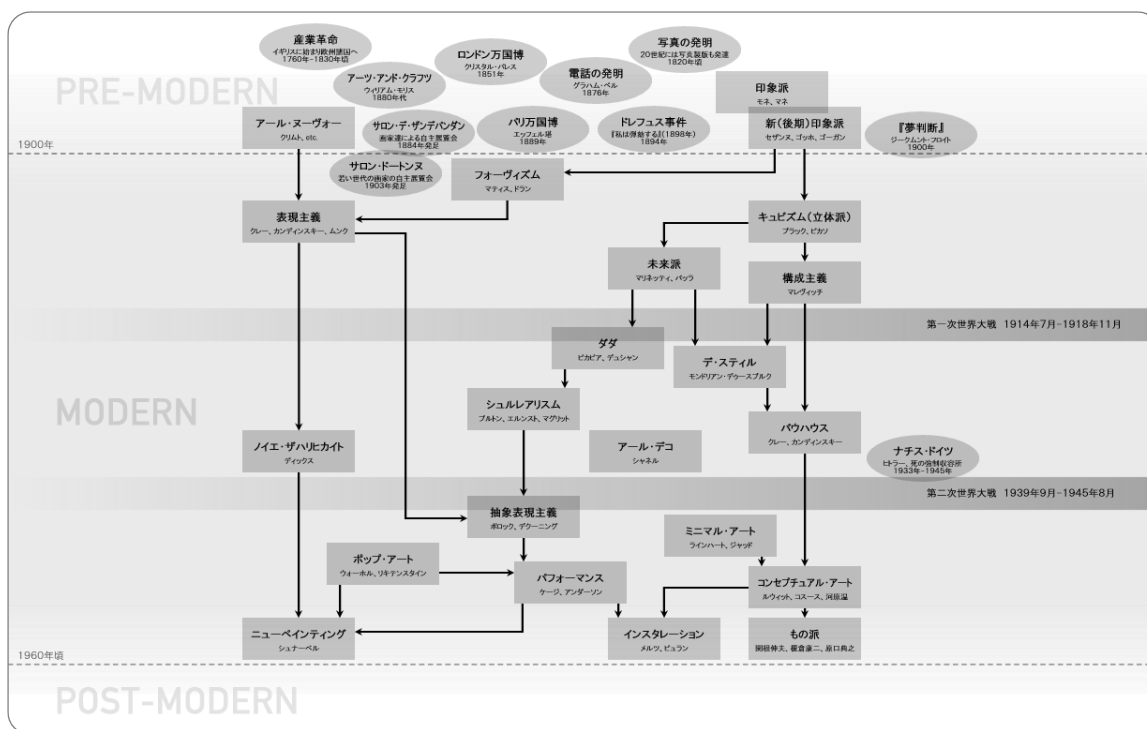
2007年度グループ研究①「ダダとシュールレアリスム」

第1回 - 桑原 翔 小林由拓 畑尾七瀬 吉越 悠

0. はじめに

20世紀初頭にアートの世界を大きく揺れ動かしたダダイズム、シュールレアリスムという二つの芸術運動。これらの運動の本質について真に理解を深め、考察を高めていくためには、まずそれらの起源を探らなくてはなりません。今回の発表では、ダダイズムやシュールレアリスムが出現する少し前の時代に遡って、19世紀半ば以降の西洋における前衛芸術の展開と経緯について重点的に研究し、それらが従来の古典的芸術をいかなる側面において打破したのか、何が前衛芸術を生んだのか、前衛芸術が目指したものは何か、などを考察しながら、その後出現するダダイズムとシュールレアリスムに迫って行きたいと思います。

1. 近現代芸術史の中に見るダダとシュールレアリスム



2. ダダイズムとは？ シュールレアリスムとは？

ダダ (dadaïsme 仏)

第一次世界大戦中(1914~17年)、チューリッヒで始まった芸術運動。戦争による大量殺戮の実行に力を貸した既存価値に対して否定、攻撃、破壊の思想を持った集団を形成し、その抗議の大胆さは同時に生産的でもあり、新しい素材と技法を導入し個人それぞれの表現手段を見いだす自由強調した。

シュールレアリスム (surréalisme 仏)

1920年代、パリでダダに続いて始まった芸術運動。フランスの詩人アンドレ・ブルトン(1896-1966)の指揮のもと、夢・驚異・想像・無意識・狂気・偶然に注目し、明らかに無関係な事物の並置などにより既成の美学・道徳とは無関係に内的生活の衝動を表現することを目的とした。

3. 戦前の前衛芸術の展開 – ダダ以前のアヴァンギャルド –

<1870年代>

印象主義 (impressionnisme 仏)

古典的で感傷的な主題や今までの規則どおりの技法に対する不満から、自由で新しい主題や技法を探求した。近代生活から取り出した主題を自然界の直接的観察と結びつけたのである。そのため、絵画では目の前にある世界の印象を細部にとらわれず全体的雰囲気を描写した。

エドガー・ドガ 『バレエ(エトワール)』
アルフレット・シスレー 『ポール・マルリーの洪水』
クロード・モネ 『散歩、日傘をさす女性』
オーギュスト・ルノアール 『ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会』
カミール・ピサロ 『ロードシブ・レイン駅』

<1880~90年代>

象徴主義 (symbolisme 仏)

半写実的主義、事物の外見を描写することを目標とする考え(印象主義)を批判。因襲にとらわれない精神的形態で夢、死、幻想、愛などの神秘的なテーマで表現をした。

オーギュスト・ロダン 『バルザック記念碑』
シャヴァンヌ 『貧しき漁夫』
ギュスターヴ・モロー 『クレオパトラ』
オディロン・ルドン 『キュロプス』
ポール・ゴーガン 『我いずこより来たり、何であり、いずこへ行くのか』
エドヴァルト・ムンク 『生命ダンス』

<1990年代初頭>

野獣派 (fauvisme 仏)

20世紀初頭、フランスに起こった革新的な絵画運動。原色による荒いタッチ、形体の単純化や大胆な変形が特徴。

アンリ・マティス 『緑のすじのあるマティス夫人』
アンドレ・ドラン 『ロンドン橋』
ラウル・デュフィ 『3つの傘』
モーリス・ド・ヴラマンク 『シャトー近郊の風景』

立体派 (cubisme 仏)

20世紀初頭、フランスに興った美術運動。現実を単一焦点の遠近法によって錯覚的に再現するのではなく、複数視点から眺め、同時に合成した図像として構成するのが特徴。

ジョルジュ・ブラック 『レスタックの家々』
パブロ・ピカソ 『ヴァイオリン』
ファン・グリス 『朝食』
フェルナン・レジェ 『煙草を吸う人』

<これら前衛芸術の特徴>

- ・挑発的で、かつ偶像破壊的
- ・新しい技法や素材の導入、実験的な方法、個人主義的
- ・既成価値、文化的・政治的にも保守的で、かつ偽善的な既成支配層や腐敗した政治への反抗心、批判

4. 戦前の前衛芸術と同時期の文化

“国際的な前衛芸術の試みの急激な高揚は政治思想や哲学思想の革命、急速な都市化や科学技術の発展など同時代の現象だった。”(マシュー・ゲール『ダダとシュールレアリスム』 p.18)

【19世紀半ば～20世紀初】

- ・ マルクス、エンゲルスら共産主義者や、無政府主義者の著作
→ 産業資本主義による進歩思想に挑戦
- ・ 作家・劇作家の急進的な作品 ex) トルストイ『平和と戦争』、ドストエフスキー『罪と罰』など
→ 物質中心主義に結びつく社会的・道徳的な諸矛盾の暴露
- ・ フランス象徴派の詩人(マラルメ、ランボーなど)
→ 写実主義よりも、「芸術思想」や想像力の世界が重要
- ・ フリードリヒ・ニーチェ『ツァラトゥストラはかく語りき』(1883-85年)
→ 形而上学的な考え方を多くの芸術家に広めた
- ・ ヴァグナーの音楽→「総合芸術制作(ゲザムトクンストヴェルク)」
→ スクリャピン『照明つきピアノ』(1910年)、カンディンスキー『黒い弧のある絵』(1912年)、マルク『コンボジットⅢ』(1914年)など
- ・ 哲学者アンリ・ベルクソンの思想
→ パリにて、キュビズム画家はじめ多くの芸術家に影響
- ・ イタリアの機械化、即時性
→ ミラノにて、未来派への影響(鉄道を描いたボッチョーニの絵画など)
- ・ 中央ヨーロッパにおける科学技術の発展
→ 科学技術への不信、自然と感動とを結びつける芸術運動
ex.)キルヒナー作品 → 野生への回帰を提案するもの
マルク → 動物を対象とした作品
- ・ ジークムント・フロイト『夢判断』(1900年)
→ 表現主義の芸術家たちに影響
- ・ 電気の普及による、写真、映画、蓄音機、無線通信などの日常化
→ 表象のあらゆる領域が「複製」に支配される
→ その反動として、表現主義的芸術の発展(パウル・クレー、アルフレート・クビーン)
- ・ 自然科学の進歩による神秘思想の発展 - “4次元への関心”
アンリ・ポワソネ『科学と仮説』(1902年)
エリー・ジュフレ『4次元幾何学』(1903年)
ガズトン・ド・バヴロスキー『4次元の国への旅』(1912年)
→ マルセル・デュシャンへの影響
→ 神秘主義的思想の発展が前衛芸術の絵画の実験をより豊かに



戦前の前衛芸術の発展は、同時期の思想や学問などあらゆる文化と大きく関わっている！

cf. “アヴァンギャルドの誕生が、科学的な革命思想がヨーロッパで最初の大膽な展開を見せたのと、年代的、地理的に一致することは偶然ではない” (C.グリーンバーク「アヴァンギャルドとキツチュ」より)

5. 発表にあたって

今回私たち第1回班が扱う文献の箇所、『ダダとシュールレアリスム』第1章では、ダダが出現するよりも前に展開していった1800年代半ばから1900年代初頭における、いわゆる「戦前の」前衛芸術の流れと、その歴史的・政治的背景との関わり方について具体的に論じられています。ダダイズム、シュールレアリスムという、今回のグループ研究の大きなテーマには直接的にアプローチしていないようにも捉えられますが、それらの起源や根本的な性質を探る上で、それらの運動が出現する直前に展開されていた芸術に目を向けることは大変有益であり、後続するグループ研究でのダダイズムとシュールレアリスムの具体的研究において大きな助けとなることを私たちとしてもここに祈る所存で来週の発表に臨みたいと思います。

第1回発表班

桑原 翔 小林由拓 畑尾七瀬 吉越 悠